

国語

[試験時間 50 分：配点 100 点]

受験上の注意

- ・開始の合図があるまで、開いてはいけません。
- ・この問題用紙は全部で8ページあります。解答用紙は問題用紙の最後にのり付けされています。
- ・それぞれの答えは解答用紙にはっきりと記入してください。
- ・解答用紙に学校名、受験番号、氏名を忘れずに記入してください。
- ・えんぴつ、消しゴム以外のものは使用できません。
- ・終わりの合図があったら、解答用紙を回収しますので、机の上に裏返しにしておいてください。
- ・問題用紙は持ち帰ってもかまいません。

一 次の①～⑤の――部の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 川の源をめぐりて歩く。 ② 社会の根幹にかかわる。
③ つり糸を垂らす。 ④ チームで紅一点の妹。
⑤ 無事に危機を脱する。

二 次の①～⑤の――部のカタカナを漢字に直しなさい。送りが必要な場合は、送りがなも書きなさい。

- ① 服のザイシツを確かめる。 ② 野生動物のチヨウサ。
③ 部屋をセイケツにする。 ④ 風にサカラウようにして進む。
⑤ 会場をモウケル。

三 次の――部と――部が、主語と述語になっているものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私は、赤いくつが似合う女の子に会った。
イ 美しい花がさく春は、心がはずむ。
ウ 昨日、新しいノートを買ってもらった。
エ 三つの条件を満たすことは、難しい。

四 次の①～④のことわざの□にあてはまる漢字一字を、後の「」から選んで、書きなさい。

- ① 雨降って□かたまる ② まかぬ□は生えぬ
③ □から出たさび ④ 弘法も□のあやまり

「 筆 花 身 金 種 口 地 」

〔五〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。〔Ⅰ〕～〔Ⅳ〕は段落番号です。

〔Ⅰ〕 科学者と科学の「素人」^{しろうと}との間に齟齬^{そご}があるテーマとして、^①宇宙人の話がある。宇宙人の存在について、科学者の意見は、「この広い宇宙なのだから、宇宙人はどこかにいるに違いない^{ちが}が、地球にやってくる^{きこ}とか、宇宙旅行で遭遇^{そくごう}するなんてことはあり得ない」が最も一般的^{はんしき}だろう。それを端的に表すのが「^②フエルミのパラドックス」である。物理学の天才でノーベル賞を受賞したエンリコ・フェルミが、昼食の席の世間話で、「宇宙には沢山^{たくさん}の生命体が存在し、知的生命も多数あると考えられるのに、なぜ地球にやってきた痕跡^{こんせき}がないのだろうね」という疑問を提示したのである。

〔Ⅱ〕 天文学者は、私たちが住む銀河系には一〇〇〇億個もの星が存在し、一〇億個の地球のような惑星^{わくせい}が付随^{ふずい}していると考えている。そして、宇宙全体には一〇〇〇億個もの銀河系に似た銀河があるのだから、地球のような惑星の数は一億かける一兆^{いちじゅう}も存在することになる。そうだとすれば、生命はいくつも生まれ、地球上の人間のような知的

生命体が多くあっても不思議ではないし、さらにもっと進化して宇宙旅行に乗り出している生命体だってあるだろう。にもかかわらず、地球に宇宙人がやってきた痕跡がないのはなぜだろうか？ という問いかけであった。

〔Ⅲ〕 このフェルミのパラドックスに関して、あり得る解答は、

A 知性を持つ生命体は簡単に生まれず、私たちは宇宙における唯一^{ゆいいつ}の存在である、

B 宇宙は巨大^{きょだい}なので何千光年と離れた地球^{はな}に到達^{とうたつ}できない、

C どの地球外文明も宇宙旅行は〔1〕折り損だとの判断を下した、

D 知的文明の寿命^{じゆみょう}は短いから宇宙旅行に乗り出す前に絶滅^{ぜつめつ}した、

という四つになるだろう。そして、科学者が持つ意見のほとんどは

B（又はD）である。生命はそう特殊^{とくしゆ}なものではなく、条件さえ整えば宇宙にありふれているだろうから〔2〕は否定^{ひてい}できる。CはBの変形バージョンで、長大な宇宙旅行をしなければならぬことを見越^{みこ}し

て、そもそも出発しないと考えるのだ（さらに、せっかく地球に到達したのだが、とてもレベルが低いので留^{とど}まる価値がなく、そのまますぐに飛び去ってしまったという可能性も否定できない）。Dは、高度な知的文明を築いたとしても、その文明の寿命が短ければ、私たちと同時代に生きているという保証がないことである。知的宇宙人が生まれても宇宙の年齢^{ねんれい}に匹敵^{ひつてき}するくらい長続きしなければ、同時代を生きることにはならないのだ。ところが、宇宙は一〇〇億年以上続いてきたのに対し、種はいくら長くても五〇〇万年くらいで絶滅したらしいから、とても互^{たが}いに遭遇^{そくごう}しそうにはないのである。

〔Ⅳ〕 一般に市民は（SF小説に慣^ならされているためか）、宇宙の大きさに関する実感が無い上に、宇宙旅行は簡単であると考えている。しかし、私たちに接触^{せつしよく}できる時代に生きている宇宙人の数を計算してみると、どんなに近くにあったとしても地球から五〇〇〇光年は離れている。光速で飛行したとしても五〇〇〇年かかるのだから、とても生き長らえて宇宙旅行が続けられるはずがない（物体の速度には光速の壁^{かべ}があることは厳然たる物理の法則であり、光速以上に飛べる宇宙船

はまさにSFでしかない）。それだけでなく、光速近くの速度で飛行するロケットはたやすく実現できそうに思われそうだが、そう簡単ではないことも科学者の常識である。現在の人類が手にしている技術では、せいぜい光速の一万分の一までしか宇宙船を加速できていない。原理的に考え得る可能な技術が実現できたとしても（実際には実現できそうにないが）、光速の一〇分の一程度が限度だろう。それでは〔3〕五万年もかかるから宇宙旅行はとても不可能だと誰^{だれ}にもわかるはずである。科学者が宇宙人の乗り物としてのUFOを信じていないのは、以上のような理由のためなのだ。

（池内了『科学と人間の不協和音』より）

注 齟齬…うまくかみ合わないこと。くいちがい。

パラドックス…合っていないように見えて、よく考えると合っていること。例えば「負けるが勝ち」など。

痕跡…あることが過去にあったことを示すあと。

付随…他のものに付き従うこと。

匹敵…同じくらいの程度であること。

SF…空想科学小説。

問一 ― 部①「宇宙人」を、別の言葉で言いかえたものを、「宇宙人」という語を使わずに本文の中から五字でぬき出しなさい。

問二 ― 部②「フェルミのパラドックス」を、くわしく説明した段落はどれですか。段落番号で答えなさい。

問三 本文の中の空らん(1)には、漢字一字が入ります。考えて答えなさい。

問四 本文の中の空らん(2)には、本文のA～Dのどれが入りますか。記号で答えなさい。

問五 ― 部③「五万年もかかる」とありますが、これについて次の問いに答えなさい。

① どこからどこまで移動するのに五万年かかるのですか。本文の中の言葉を使って答えなさい。

② どんな移動手段を用いると五万年かかるのですか。本文の中の言葉を使って答えなさい。

問六 段落ⅢとⅣの関係について、正しいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Ⅲは、Ⅳを補う役割をはたしている。 イ Ⅲは問題点を示し、Ⅳで答えている。

ウ Ⅲとは反対のことをⅣで述べている。 エ Ⅲの説明を受け、Ⅳでまとめている。

問七 本文中の内容と合っているものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ノーベル賞を受賞した物理学者ですら、宇宙人に関することはわからないことだらけなのである。

イ 一般市民と科学者の間には大きなみぞがあり、その一つの例として宇宙人についての考え方が異なる。

ウ SF小説を読むのは悪いことではないが、現実とのちがいを意識しながら読まなければならない。

エ 文明の寿命がのびることが最も望ましいことなので、科学者たちはひたすらそれに取り組むべきだ。

〔六〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自分で言うのもなんだけれど、なんでもそこそこできる子どもだった。実際ほとんどの授業のあいだ、しかられて廊下^{ろうか}にいたにもかかわらず、親が呼び出されて深刻な注意を受けるほどこっぴどい成績をとった覚えもなく、体が小さかったので体育はすばしっこさだけでなんとかだったし、絵を描く^{えが}のはもともと嫌いではなく、音楽の楽器演奏はうまいさばかりかたをよく知っていた。結果、私はなんでもそこそこできることになっていたし、自分でもそう思っていた。そこそこ以上になれないことは自分でもよく理解していて、けれど①それを目指すつもりは毛頭なく、そこそこ万歳^{ばんざい}、くらいの気持ちでいた。

ところで私の通った小学校は、上級生になると強制的にクラブに入らなくてはならなかった。美術部か、ブラスバンド部か、ソフトボール部、選択肢^{せんたくし}はその三つしかなかった。一番さばれそうだったし、「そこそこ」のなかでもとくに美術は秀^{ひい}でているという自負がそれな

りにあったので、私は美術部を選んだ。美術ではまた、油絵か、日本画を選ばなくてはならない。そのほうが自分の粗雑^{そざう}さで耐え^たえる気がしたので、私は油絵を選んだ。

美術部でも私はそこそこできた。私たちは油絵の具とカンバスを持って、学校の中や、ときには学校外の自然の中を歩きまわり、好きな場所で絵を描く。与え^{あた}られた時間がたとえば九十分だとしたら、私がしていたのは、六十分間仲良しの友達としゃべりたおし、のこり時間が少ないとようやく気づいてあわててべたべたとカンバスに絵の具を重ねる、それだけだった。もちろんそれでいい絵など描けるはずはないのだが、絵らしきものはしあがった。そしていつもそれは、きまつてそこそこの出来で、絵って楽しいじゃん、私、絵うまいじゃん、などと、②おろかしくも思っていた。

六年生の夏休み後だった。夏休みの宿題だった絵を各々^{おの／＼}持ってきて、

品評会がおこなわれた。九十分中六十分をおしゃべりですぐすように、夏休みも四分の三ほど遊んで過ごし、残りの少ない日数で描くべき何かを見つけることもできず、私が描いたのは自室の棚につっこんである③羊のぬいぐるみだった。ずらりと並べられた生徒たちの絵を見ていつて、先生は汚いなあ、とか、これはおもしろいね、とかいろいろコメントし、相変わらずそこそこの出来の私の絵の前で、ふうん、ぬいぐるみか、とかなんとか、とくべつ感慨もない声を出して通り過ぎていった。何枚目かにまなちゃんの絵があつた。まなちゃんも油絵だった。

それほど大きくないキャンバスに一本の道が描かれていた。舗装されていないその土の道は、雑草やすすきに縁取られ、ゆるくカーブを描きながらまっすぐ続いていた。私の目はその道に釘づけになった。

夏の終わりのだだをこねるような蒸し暑さ、草いきれ、日が暮れはじめる直前のさびしき、乾いたかすかな風に舞う土埃、美術室に座つた私を、そうしたものが一瞬にして包みこんだ。もう帰らなくてはいらないのに、このゆるく曲がつた上り坂の向こうの景色をたしか

れはまなちゃんが描いた絵と、よく似た構図だった。舗装されていない道路が雑草に縁取られてまっすぐに伸びている。

おそらく人は、こうして曲がりくねったりまっすぐ伸びたりしながら、先の見えないほど続いていく道に、どうしようもなくひかれる習性があるのだろうと、その絵を見て考えていた。この道の先が見たい、でも帰らなくてはならない、それでも先へいきたい、そういう気持ちは子どものほうがむきだしで、野蠻なほど強いんだろうと思う。私はそこに立ちながら、自分がするすると小さくなって、油絵の具にお

めにいきたい、そんな気持ちまで味わった。私はその絵のなかに突っ立っていた。

私はその絵を見たとき、④そこそこであることを心から恥じた。憎んだと言つてもいい。小学生の女の子が描いた一枚の油絵は、何か⑤奇妙な切実さに満ちていた。その切実さはこちらに触手を伸ばして、好むと好まざるとにかかわらず、見る側を絵のなかにひきずりこんでいく。切実さは力だった。力を持つ何かを私ははじめて間近で見た。そして、この世の中には圧倒的になかなわなことがあのだと、はじめて知った。

夏休みのあいだに同級生の女の子が描いた一枚の絵は、あまりにも私を打ちのめしたものだから、実際の記憶のように心にはりついていく。あの絵を思い出すとき、土埃も、生温い風も、傾きはじめた陽の光も、感覚として思い出すことができる。たしかにあのとき、私はあの絵のなかに入りこんだのだろう。

先日、美術館である絵を見て、私は足を止めた。岸田劉生が昭和初期の原宿の道を描いた絵だった。絵の雰囲気はまったく違うが、そ

いを嗅ぎ、理由もわからないまま恥じ入り傷ついて、それでも目を外すことができずに、一枚の、奇妙な力を持つ拙い絵を眺めている気で⑥そこにいた。

(角田光代『これからはあるくのだ』より)

注 秀でている…すぐれている。

粗雑…おおざっぱで、いい加減なこと。

キャンバス…油絵を描くときに使う布。

感慨…しみじみと深く心に感ずること。

拙い…へたであること。おとつていること。

問一 ―― 部①「それを目指す」とありますが、どういうことですか。指示語の内容を明確にして十五字以内で答えなさい。

問二 ―― 部②「おろかしくも思っていた」とありますが、何を「おろかしい」といったのですか。ふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 九十分のうちの六十分間を、おしゃべりしていたこと。

イ 努力もしないで絵が描けることに、満足していたこと。

ウ 自分は、絵がだれよりもうまいと思いきんでいたこと。

エ そこそこの絵を、ほめてもらいたいと思っていたこと。

何字以内で答えなさいという問いはすべて句読点もふくみます。

一

①

②

③

④

⑤

二

①

②

③

④

⑤

三

四

①

②

③

④

五

問一

問二

問三

問四

問五

①

②

五

小計

問六

問七

五

小計

六

問一

問二

問三

問四

とくうじや。

問五

問六

問七

六

小計

得点

出身小学校

立

小学校

受験番号

氏名